

# ハイデガーとプラトンの対決<sup>1</sup>

納富 信留（東京大学）

## *Heidegger's confrontation with Plato*

Noburu Notomi

Plato was one of the main targets of Heidegger's philosophy. In his lectures and publications, Heidegger critically discussed Plato's Theory of Ideas and Ontology, so as to develop his own thoughts. Although many criticisms are directed against his interpretations—such as mistranslation, misunderstanding, and excessive appeals to etymology—we should take Heidegger's critical examinations seriously, for he confronted Plato's philosophical questions seriously and tried to answer them fruitfully. We ourselves should confront both Plato's philosophy and Heidegger's confrontation of Plato.

Heidegger first examined the concept of *alētheia* by analysing the Simile of the Cave in Plato's *Republic* with a lecture from the 1931/32 winter semester at the University of Freiburg. Between Plato's original concerns and Heidegger's new focuses, there are a few crucial differences, as well as many similarities. First, Plato did not ask Heidegger's main question—"What is truth?" Second, based on his modern concern with Dasein, Heidegger also asked, "Who are human beings?" Third, Heidegger interpreted the question "What is the good?" by examining the Simile of the Sun. However, I point out crucial mistakes in his interpretations, which cause significant misunderstandings of Plato. In addition, Heidegger ignored the political aspects of the fourth stage of the Cave—namely, what philosophers should do inside the Cave. This may indicate some crucial problems of Heidegger's political philosophy.

**keywords:** Platon, Ideenlehre, Höhlengleichnis, Wahrheit, Unverborgenheit

**キーワード:** プラトン、イデア論、洞窟の比喻、真理、非秘蔵性

---

<sup>1</sup> 本論文は、ハイデガー・フォーラム第13回大会（2018年9月16日、早稲田大学 戸山キャンパス）で発表した原稿に修正を加えたものである。多くの方から有益なコメントを頂戴し、誤りや不十分な点を訂正することができた。とりわけ、古荘真敬氏には、事前から議論をしていただいた。心より感謝申し上げたい。

## 1、プラトン、ハイデガー、私たち：基本姿勢

ハイデガーはプラトンに向き合い、そこで徹底的な思索を展開した哲学者の一人である。彼が講義や著作でプラトンのイデア論や存在論を論じ、そこから示唆や問題を見出して自身の思索にしたことを、私たちはまず真剣に受け止めるべきである。ハイデガーがくり返し挑戦してきたプラトンやギリシア哲学の解釈については、誤訳、過度の語源解釈、強引な読解、無理解など、様々な学術的問題点が指摘されているが、それらをあげつらうことは哲学的に生産的とは思われない。それ以上に、彼がプラトンの投げかけた哲学の問いに向き合って応答したことが重要である。私たちはまず、ハイデガーとプラトンの対決に立ち会う。ここでは、プラトンに向けられる諸批判にも真剣に向き合うことが、私たち自身がプラトンと共に哲学を遂行することである。

ハイデガーは、カント、ニーチェ、フッサールら、プラトン以外にも多くの哲学者を議論の対象とした。ギリシア哲学でもアリストテレスをより主題的に扱い、他方でアナクシマンドロス、ヘラクレイトス、パルメニデスを高く評価した。だが、とりわけ後期に批判の対象となるプラトンとの関係は、特別な意味を持つ<sup>2</sup>。その意味を解明することが、本稿の目標の一つである。

ハイデガーはプラトンを読み、そこで自ら哲学し、プラトンと対決する<sup>3</sup>。

ここからまた、新たな問いのための地盤を、つまり真理をアレーティアとするプラトンの本質規定が呼び起こす問いのための地盤を、我々は初めて獲得する。つまりプラトン自身との対決 die Auseinandersetzung mit Platon selbst、従って西洋の全伝承との対決のための地盤を獲得する。(46-7/54、下線論者)

## 2、プラトンと対決する私：考察基盤

ハイデガーのプラトンとの対決を受け止めるには、まず、私たち自身がプラトンと対決し、その中でハイデガーと対決しなければならない。それなしでは、たんにハイデガーの内在的な解釈問題となってしまう。自らが哲学することなく解釈を述べても、それは哲学とは程遠く、ハイデガーに向き合うことにもならない。私もハイデガーを論じるにあたって、私自身がプラトンの哲学をどう理解しているかを提示し、ハイデガーの理解と対決させていく必要がある。

<sup>2</sup> 渡部 [1994]、40-41 がまとめるように、ハイデガーのニーチェへの姿勢の変化はプラトン批判と並行する。プラトンとニーチェはハイデガーにとって一対であったのかもしれない。他方で、ハイデガーにとってフッサールとアリストテレスが決定的であり、プラトンへの傾倒は一時的な現象にすぎないという見方（例えば、フィガール [2017]、130）には反対する。

<sup>3</sup> 「哲学的に問う者にとって、プラトンは十分すぎる程語っている」（GA 34, 111/邦訳 119）。以下、『真理の本質について』（全集 34 巻）からの引用は、細川亮一とイーリス・ブフハイムの翻訳に拠り、原著/邦訳のページ数のみを記す。

英米分析的手法が主流の現代の古代哲学研究では、海外でも日本でもプラトンの「イデア論」はほとんどともに理解されていない。その原因は研究者が依拠する4つの前提にある、と私は考えている。

第一に、哲学という営みをどう見るかという基本に問題がある。現代では、哲学とは体系的な理論的考察で、学術機関で生産される学説に限定されるか、一般の人たちも共有する世界観に過ぎないと思われている。

第二に、英米の伝統で根強い経験論がある。私たちがこの世界で見たり触れたりする、感覚・経験の対象のみが存在するとする立場である。

第三に、近代認識論で、思惟する「私 ego」は純粹で自己同一的な主体、そこから世界を捉える主観とされる。デカルトの「コギト」、カントの「統覚」、フッサールの「超越論的主観」などが、「私」であるとされてきた。

第四に、近現代の哲学では「イメージ（像、想像）」が低く扱われている。イメージや比喩は実在に対して、貧弱な内実、劣った説明手段に過ぎないとされ、哲学理論ではほぼ無視されている。

これら4つの近現代哲学の前提の上で、アリストテレス以来のプラトン批判、つまり、イデア論が余剰な存在を現実を追加する空論、あるいは誤った形而上学であるとする偏見が定着している<sup>4</sup>。世界を認識し経験する「私」が固定的な視点であり続け、今見え経験する世界が全てだとしたら、イデアはたしかに余剰であり、その実在を主張することは誤謬である。これに対抗して、私は本来のプラトン哲学を示そうと努めている。

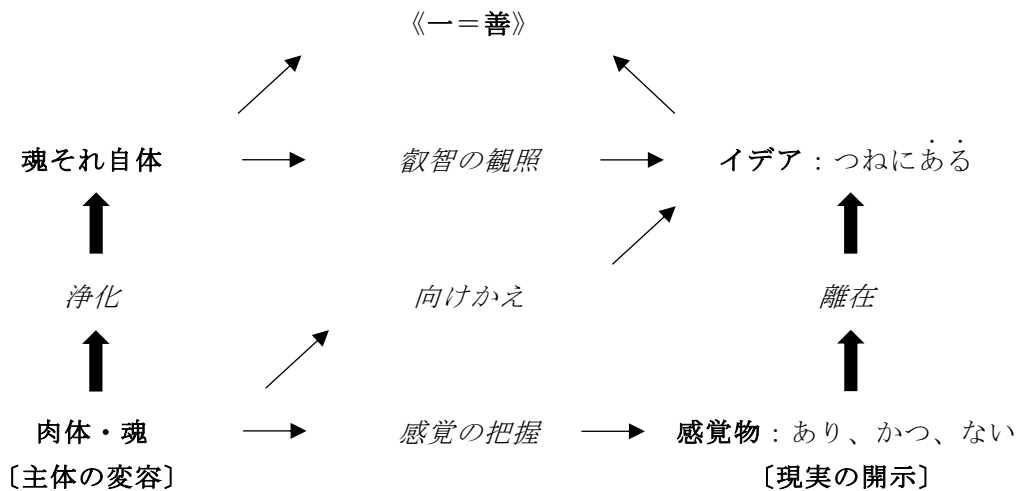
まず第三の点に関して、プラトンが問題にするのは主体の変容である。「私」は固定的で自己同一的な主体ではなく、訓練をつうじて認識と存在の両面において変容する。古代から中世の哲学で中心的であったこの視点は、近代哲学においては希薄、ないし忘却されているが、それでもヘーゲル、ニーチェ、ハイデガーらは「変容」を扱っていた。

第二の点について、プラトンの哲学とは現実の開示であると考え。私の変容に応じて、経験する世界も変容する。つまり、感覚で捉える世界とは別に、より根源的な地平が顕現するのである。この意味で、通常安易に批判される「二元論」こそ哲学の始点であり、「心身分離」は『パイドン』が提示する「死の訓練」としての哲学のあり方である。

自己の変容と現実の開示という2つの契機が重なって、「超越」と呼ばれる体験が生まれ

<sup>4</sup> 例えば、現代英米の代表的研究者の一人、ゲイル・ファインはイデア論の鍵である「離在」について、次のような問いを發する：“Are there universals, independently of sensible objects?; ‘If, as Aristotle and I believe, forms are universals, then to say that they are separate is to say they can exist uninstantiated by sensible particulars.’” (Fine [2003], 32) この問い自体が、イデアという問題を完全に捉え損なっている。

る。次の図で、2つの柱で共に上昇することが「超越」の体験、構造を示す<sup>5</sup>。



第四の点に関しては、イメージの豊かさを再認識する必要がある。実在と像の関係は固定的な階層で捉えられるべきではなく、像にこそより現実性があるという逆転や移相が認められる。これは坂部恵や井筒俊彦が強調する、東洋哲学に顕著な視野かもしれない<sup>6</sup>。

最後に第一の点に関して、哲学を私たちが生きる実践として遂行する必要がある。その意味で、アイデアを論じることは単なる体系的理論や教説、あるいはその解釈や理論的検討ではなく、アイデアを考えるという実践をつうじて私自身が変わっていくあり方である。哲学とは、私が生きることそのものなのである<sup>7</sup>。

私の見るところ、『存在と時間』などでのハイデガーの関心は、私のプラトン理解に多くの面で呼応する。

まず、非本来的なあり方、つまり「頹落」から本来的なあり方への変容の強調は、プラトン哲学における「浄化・離在」という魂の変容にあたる。とりわけ、本論で扱う「アレーテア」論こそ、「自己の変容 *sich wandeln*」の問題である (113/122)。それは、非秘蔵性の変容 *Wandelung* が自己自身の解放に関係しているからであり (117-8/127-8)、哲学とは、人間や存在の理解を根本から変容 *verwandeln* させる、「問うこと」である (116/125)。語りをつうじた変容こそ、プラトンとハイデガーに共通する、ロゴスの遂行であった。

そこでは、さまざまな配慮、構えの分析が重要となるが、これらがソクラテスの使命とした「魂の配慮 *ἐπιμέλεια*」や、それをアイデア論として展開した《洞窟の比喩》の「魂の向け変え」に当たることは、言うまでもない。

<sup>5</sup> 納富 [2015a]、第3章参照。この図は主に『パイドン』のアイデア論をモデルにしたものだが、頂点に「一＝善」を加えたのはプロティノスへの展開を睨んでのことである。

<sup>6</sup> 像の哲学への日本からの視点は、Notomi [2019]が論じている。

<sup>7</sup> ハイデガーが退ける「哲学」観と比べられる (115-6/124)。ハイデガーがこのような「哲学・哲学者」への問いを深めたのが、プラトン『ソフィスト』読解 (1924/5年冬学期マールブルク講義など)をつうじてであることは、容易に想像できる。私が提示する哲学観は、ピエール・アドが古代哲学に観取したものと共通点が多い。

ハイデガーが『存在と時間』以来強調する存在論的差異、即ち「存在者／存在／存在の意味」の3つの次元が、プラトン哲学における「多様な現れ／アイデア／善のアイデア」の区別に由来することは、細川亮一の一連の研究が明らかにしている<sup>8</sup>。

ハイデガーとプラトンの共通性、あるいは影響を意識しつつ、両者の対決を見極めていきたい。

### 3、プラトンと対決するハイデガー：《洞窟の比喩》をめぐる3つの問い

ハイデガーはプラトンの何に応答するのか。焦点は「真理」に向けられる。ハイデガーが『ポリテイア』の《洞窟の比喩》を丹念に読み解きながら、自身の「真理」の思索と対決させた1931/32年冬学期のフライブルク講義を、基本テキストとして検討する<sup>9</sup>。

ハイデガーが《洞窟の比喩》に定位して行う「真理」の解釈は、英米圏でも非分析系の解釈者たちがしばしば検討を加えているが、分析哲学的アプローチからはほとんど無意味な議論として扱われている<sup>10</sup>。私は第2節で示したギャップがその原因であると考えている。

#### （1）《洞窟の比喩》への注目

まず、何故《洞窟の比喩》なのか<sup>11</sup>。プラトン哲学の頂点とも見なされる有名なテキストではあるが、ハイデガーが何故、どのようにこの箇所を取り上げるのかが重要となる。

ハイデガーはこの比喩を「完全に自立できる」ものとして、対話内部で比喩が置かれた連関は「故意に顧みられない」との方針を示す（18/18）。そこで、文脈から切り離しても内実の理解は「少しも傷つけ狭めることなし」に為されうると断言するが、それはプラトン対話篇の読解において危険であり、基本的に誤りである。実際、ハイデガー自身もすぐ後で《太陽の比喩》への連関に遡ることになるが（46/54, 95-109/103-117）、対話篇の文脈に即した仕方ではない<sup>12</sup>。

<sup>8</sup> 細川によると、『存在と時間』の基礎的存在論では「存在の意味への問い」が「プラトンのアイデア論の問題圏の内を動いている」（細川 [1994]、23）。また、存在論的差異はアイデア論に対応し（細川 [1994]、25）、「『存在と時間』は「存在の意味への問い」を問うことにおいて、プラトンの「存在の問い」（善のアイデア）の取り返しである。しかし、それは同時に『存在と時間』がアイデア論の軌のもとにあることを意味しているのである（細川 [1992]、228）。

<sup>9</sup> 本論では1940年に公刊した論文「真性についてのプラトンの教説」とこの講義との相違は扱わない。渡部 [1994] が両者の違いを詳細に検討したように、後年に明瞭となるプラトン批判は当初の講義では強調されていない。私はやや定型化した後年の批判には興味を持たない。ハイデガーがプラトンのテキストに向き合った現場で何が生じたかが重要であり、その意味で最初の講義を重視する。

<sup>10</sup> イギリスの分析的古代哲学研究を代表するジョナサン・バーズは、Barnes [2011]でハイデガーの議論をほぼ全面的に退けている。ただし、彼が取り扱うのは公刊論文であり、講義ではない。非分析系のより好意的なアプローチは、Gonzalez [2009]、Partenie and Rockmore (eds.) [2005]、Hyland and Manoussakis (eds.) [2006]に収められた諸論文に見られる。

<sup>11</sup> ハイデガーが《洞窟の比喩》をくり返し取り上げたことは、渡部 [1994]、42注1参照。

<sup>12</sup> この比喩を正確に解釈する「正攻法」は取らないという言い訳（98/106）は、講義という便宜に訴えるもので、説得力を持たない。

第6巻末から第7巻始め（巻分けは古代からの慣習であるが、プラトンの意図ではない）に続けて語られる《太陽の比喩、線分の比喩、洞窟の比喩》は3つ組であり、その連関において意味を持つ。この箇所については、現代では《線分の比喩》がしばしば分析の対象となる以外、専門研究者はこの主題を避ける傾向にあり、種々の勝手な解釈が散見される他、芳しい成果は出ていない。その中で、もっとも比喩らしい比喩である《洞窟の比喩》を丁寧かつ哲学的に読み解くハイデガーの試みは、低調な専門研究との対比できわめて魅力的であり、解釈として十分に評価される。何と云っても、これらの比喩はプラトン哲学の頂点であり、プラトンが後世に残したもっとも問題含みのテキストである。これにどう向き合うかは、すべての哲学者、とりわけ西洋哲学の伝統の上にある者に求められる課題である。この点でまず、ハイデガーのチャレンジに敬意を表したい。

3つの比喩は、哲人統治者の教育において、学びの対象として提示された「善のアイデア」を説明するためのもので、ソクラテスはそれが「何であるか、を知らない」がゆえに、比喩＝像 εἰκὼν で語ると言う。最初から比喩が3つ語られるとは明示されず、最初に「善の息子」として語られた「太陽」の比喩に続いて、語り残したこととして「線分」という比喩が語られ、さらに「洞窟」の描写が語られる。3つの比喩の関係は専門研究のテーマとなっているが、3者は部分ごとに完全に重なる形で対応するのではなく、むしろ別の語り口で、異なった方向から照らし出す移行が意図されている。「太陽：善のアイデア」を類比で示す《太陽の比喩》は、基本構造を直裁的に示すが、スタティックな提示である。それにつづく《線分の比喩》も4分割された線分の関係を示すが、可視（下）から可知（上）へと類比的に上昇する、認識と対象の関係的なあり方の提示となる。《洞窟の比喩》はその区分を踏まえた似像において、「向け変え、上昇、慣れ、下降」といった動きを主題とするダイナミックな比喩である。対比から運動へという動きが3つの比喩の連関であり、《洞窟の比喩》は最初の2者を踏まえずには理解できない。

「比喩 Gleichnis」は事物そのものものではなく「感覚像 Sinn-Bild」に過ぎないが、それだけでは自立しないがゆえに、かえって「見させつつ目配せをする」という働きを担う。それは、隠れることを本性とする「存在」に対応し、その意味で、比喩の解明そのものが真理の本質をアレーテΙΑに求めるべきこと目の目配せとなっている（18-9/18-9）<sup>13</sup>。

ハイデガーが注目するように《洞窟の比喩》は「私たち人間の教育と無教育」を示す意図で提示されるが、最初の2つの比喩に「人間」は登場しない。さらに対話の主題である「哲学＝政治」という側面も《洞窟の比喩》、とりわけ第4段階で初めて登場する。3つの比喩のこういった連関と位置づけを把握することは、解釈の基本となる。故意に《洞窟の比喩》だけを切り離すハイデガーの扱いは、これらの連関を失うことで解釈に偏りを生じさせているのではないか。ただし、これはハイデガーに限った失敗ではない。

《洞窟の比喩》の読解でハイデガーが提起する「問い」は3つあると捉えて、その問いへの対応から検討を加えよう。それは「真理とは何か、人間とは誰か、善とは何か」である。

<sup>13</sup> 「比喩＝像」という語り口が、隠れるものとしての存在を明らかにするという点は、景山洋平氏に指摘してもらった。

## （２）「真理とは何か」

ハイデガーは《洞窟の比喩》に「真理 ἀλήθεια」の本質が示されていると解する。この語はその範囲（514a1-517a6）に3箇所しか登場しないとはいえ<sup>14</sup>、特定の焦点でテキストを読み込むことは解釈の手法として認められている。つまり、このテキストを「アレーティア論」として読むことは作業仮説として有効であると、私はまず考える。

だが、ハイデガーが「アレーティア」というギリシア語の語源から読み解こうとした「欠如」としての真理、つまり「非秘蔵性 Unverborgenheit」という意味は、プラトンにあるのか<sup>15</sup>。

ハイデガーの提案に寄り沿うと、まず、プラトンが「忘却」を語る「想起説」にヒントを見出すべきであろう<sup>16</sup>。不死の魂は生前に持っていた知識を、この世に生まれる折に喪失する（『パイドン』75e, 76d）、つまり「忘れてしまう ἐπιλήθω」（75d, cf. 76a）。この「忘却 λήθη」（75d）からの取り戻し ἀναλαμβάνειν（75e）が「想起＝学び」である。それは、肉体と結合して生まれる「人間」が関わるあり方である。他方で、浄化された魂が関わる純粋なものは「真理 τὸ ἀληθές」と呼ばれ（67b）、浄めという切り離し過程を「欠如・否定」と見ることは可能であろう<sup>17</sup>。そんな魂が天上で観想するのは、「真理の沃野 τὸ ἀληθείας πεδῖον」（『パイドロス』248b）であり、「もし私たちには、あるものどもの真理が ἡ ἀλήθεια τῶν ὄντων つねに魂のうちにあるのなら、魂は不死だということになる」と結論づけられる（『メノン』86b）。

『存在と時間』が出版された1927年の夏学期に、マールブルク大学で行った講義「現象学の根本諸問題」でハイデガーは、実際に『パイドロス』249b-cと『パイドン』72e以下の想起説に言及している。現存在である人間は、存在をすでに了解していなければならない。かつて見られていたが忘却してしまった存在に眼差しを向ける可能性、それがプラトンの言う「想起」であった（GA 24, 464-5/469-71）。忘却から真理を開示していく「想起説」は、ハイデガー的な「非秘蔵性」としての「アレーティア」の本質を示すと言ってよい。ここでの「忘却」とは、ハイデガーが指摘するように、主観的・心的体験ではなく、人間を襲い巻き込む「客観的な生起」である（GA34, 140-1/148-9）。それは肉体を伴って生まれるという「人間」の出来事である。この点での二人が向かう問題は重なっている。

《洞窟の比喩》を含む『ポリテイア』の中心巻は、「想起」という契機を語らない。したがって、ここで「アレーティア」が問題になっているとして、それは他の対話篇で語られた「想起説」とは異なる仕方で、つまり、隠されてあるものが暴かれ、暗闇から光へと世

<sup>14</sup> 517a6 までに限れば、515c2, d7, 516a3 の3箇所であるが、ハイデガーはそれらの箇所を丁寧に扱っている。「アレーティア」関係の語の用例は、《太陽の比喩》には6箇所あるが、《線分の比喩》では511e3の1箇所のみである。

<sup>15</sup> 発表時に中畑正志氏から質問いただいたように、プラトンやギリシア哲学において「アレーティア」をハイデガーの言う意味で理解できるのかという問いに対しても、それは可能であり、ギリシア哲学理解の一つの有力な道筋であると考え。川島[2004]が注目したように、ソフォクレス『オイディプス王』は「真理」の開示が中心テーマとする（57-8, 68-73, 203-11）。見えないものと見えることの逆転が、古代ギリシアにおいて「真理 ἀλήθεια」の言葉に含意されている。

<sup>16</sup> 「想起 ἀνάμνησις 説」は、『メノン』で初めて提示され、『パイドン』と『パイドロス』でさらに展開されている。ただし、『メノン』ではまだイデアは登場しない。

<sup>17</sup> 第2節での「超越の体験」の図で、左柱での上昇がこの浄化にあたる。

界が開かれるという語りにおいてである。無論、2つの語り方をどちらも「比喩的」と見なすことは構わないが、それで片付けることもできない。

ハイデガーがプラトンにきわめて近い場所で「真理」を思索していたことは、ある程度確認できたとして、両者の間での大きな違いもまた確認される。

ハイデガーは、私たちが取り上げている講義「真理の本質について」を始めとして、「真理とは何か Was ist Wahrheit?」という問いから「本質 Wesen」を論じている(1/3)<sup>18</sup>。無論、単なる定義を求めている訳ではなく(64-5/71)、「草稿からの補遺」では、真理の本質への問いが外在的で付加的であるという外見を退け、「我々の真理追求がその上でなされる根拠と地盤が、動揺に陥る。真理の本質は変容するだろう」(323/345-6)と語る。だが、ハイデガーが「真理」を、「本質・あり方」を問うべき対象として扱っていることは確かである。対照的に、プラトンは「真理」をそれ自体として論じることはせず、「真理とは何か」という問いを立てることもない<sup>19</sup>。

中世哲学で超越概念に数えられる「真理 verum」であるが<sup>20</sup>、プラトンにおいてはアイデアや概念としての扱いは受けていない。したがって、「真理の本質・あり方」への問いも、プラトンにおいては問われていない。しかしながら、「真理」は哲学の要であり、問題であり続ける。それはけっして「言表と事実の一致」という規定で尽くされるものではなく、現代分析哲学の真理論のように、単に形式的なもの(タルスキー)でも、余剰なもの(デフレ理論)でもない。「善とは何か」を論じる『ピレボス』では、「美 κάλλος・均整 συμμετρία・真理 ἀλήθεια」が「善」を捉える3つ組とされている(65a)。他方で、プラトンが「～とは何か τί ἐστιν;」というソクラテスの問いを「真理」に向けていないことは重要である。「真理のあり方・本質 Wesen」をテーマにしないことは偶然ではなく、「真理」がそのような問いや考察の対象ではないことを示唆する。プラトンは、ハイデガーのような問い方が適切だと考えていなかったのかもしれない。二人のこの相違は、探究において何を意味するのだろうか。

### (3) 「人間とは誰か」

ハイデガーが《洞窟の比喩》を取り上げた鍵は、「人間」にある。先立つ《太陽、線分の比喩》はとくに人間を登場させなかったが、《洞窟の比喩》の冒頭でソクラテスは「教育と無教育に関して、私たちの本性」を喩えると明言する(514a2)。そして、分析が始まる第1段階第1行から「人間たち ἀνθρώπου」が描かれていく(514a3)。ハイデガーの考察は、こ

<sup>18</sup> Barnes [2011], 79 は、「本質」が変わることはありえず、真理の2つの「概念 conceptions」の変化として語るべきであったと評している。Wesen というドイツ語は、必ずしも essence では尽きないニュアンスを持つのかもしれない。

<sup>19</sup> プラトンにこの問いはないが、後世の偽作『定義集』63には「真理。肯定と否定における情態、真なるものの知識」とある(413c)。アカデメイアでの学問では、真理の定義も論じられていたであろう。

<sup>20</sup> 超越概念 transcendentia としては通常「ある ens、一 unum、善 bonum、或るもの aliquid、真 verum」が挙げられる。



ここに焦点を合わせる<sup>21</sup>。「人間とは誰であるかを、誰が一体我々に言うのか？」(6/8) という序論の問いは、私たちの思いを揺り動かす。私たちは「人間とは何か」を自明だと思い、それを言う人など問うことはないからである<sup>22</sup>。問いの鋭さが際立つ。

ここでハイデガーが、「人間とは何か Was」という問いにもまして、「人間とは誰か Wer」という疑問を発していることは注目されるべきであろう。これは、人間一般についての本質の問いというよりも、問う私自身に突きつけられる問いである。

ハイデガーは《洞窟の比喩》の第1・第2段階で、「人間であること」を「非秘蔵性の内にたつこと／秘蔵性の内にたつこと」(25-7/30-1)という仕方で分析する。影と現実的なものの区別を遂行することが、「人間で - あること、実存すること」である(37/43)。考察はさらに深まる。

人間に生起すると言うが、人間とは誰か Wer ist das?。人間とは我々自身であり、我々のみなのである。人間とは各人自身である。各人は今有る限り、即ちプラトンによってこの比喩の前に置かれ、そしてこの生起 Geschehnis の前に置かれている限りの各人自身である。(45/53)

自らのあり方を問うもの、問うべく立たされている者としての現存在 Dasein というハイデガーの基本姿勢が<sup>23</sup>、《洞窟の比喩》というテキストを前にし、プラトンに問われてそれに応じ答えようとする限りでの私自身＝魂、そこにおいて人間が成立することを示す。ハイデガーはこの文を語ることで、《洞窟の比喩》にそれを語らせる。私たちが「非秘蔵性の本質から初めて人間とは何か was der Mensch ist を知る」(75/83)のだとしたら、非秘蔵性を示す《洞窟の比喩》、その読み解きこそ、私たちに人間、つまり自分自身を開示する。

洞窟の比喩を理解するとは、人間の本質歴史を、自己自身を最も固有な歴史の内で概念把握することを意味する。(77/85)

対話篇を読む者を問いに晒し、そこで対話において哲学を遂行させるプラトンの哲学が、ここでは見事に遂行されている。

《洞窟の比喩》は真理の比喩として「人間とは何か」を明らかにする。だが、これはプラトンが問うた問いとは異なっている。プラトンは「人間」についての問いを、どの対話篇でも問うておらず、「人間」のアイデアを語ることもない<sup>24</sup>。『パイドン』最終論証が明瞭に示すように、人間の生をなすアイデア的なものは「魂」であるが、その魂は「人間」という

<sup>21</sup> ただしこの一行は結論部(114-5/123-4)まで取り上げられない。その意味が全体の焦点になるからである。

<sup>22</sup> この問いは、後に「非秘蔵性の本質」が人間の生起であると論じる時、同じ形で問われる(75/82)。私たちはその「人間」をいまだ知らない。

<sup>23</sup> 《洞窟の比喩》のこの人間とは誰か、という問いに、実存すること Existieren、現存在 Dasein と答える(77/84)。『存在と時間』の問題圏域で動いていることの確認である。

<sup>24</sup> 後期の対話篇『ピレボス』15aには「人間」がアイデアのように扱われる箇所があるとされるが、私はそう解釈しない。

アイデアに与るものではない。それは、プラトン哲学において、魂が別種の肉体と結びつくことで、種々の動物に転生することから明らかである<sup>25</sup>。したがって、プラトンにとって「人間とは何か」は、アイデアとして問われる問題ではない。他方で「魂とは何か」は別の問いである。魂は人間だけでなく動物やあらゆる生き物が宿すものであり、『ティマイオス』第1部が論じるように「宇宙の魂」がより基本にある。プラトンは少なくともこの意味では、人間中心の発想に与していない。

『存在と時間』で「現存在」から考察を展開したハイデガーの立ち位置は、あくまで人間に定位することで、存在へと至る方途を探ろうとするものであった。プラトンが「ロゴス」に基本を据えた時、それを語る人間は主題化されない。「人間」はプラトンにとって究極の問いではなく、むしろ近現代哲学が一層引き受けた問題であった。「人間」と並んで、ハイデガーが中心に据える「時間」や「自由」という問題に、プラトンは必ずしもこだわらない。プラトンとハイデガーで、直面する哲学の課題に温度差が顕著である。

#### （４）「善とは何か」

《洞窟の比喩》が先立つ2つの比喩と合わせて示すのは、「善それ自体＝善のアイデア」である。そこでは、洞窟外の世界を照らす「太陽」がその善のアイデアにあたる。その内実をハイデガーはこの比喩の解釈の内では扱わず、一旦《太陽の比喩》に戻ることで解明しようとする（46/54, 95/103以降）。

3つの比喩を導入する前に、ソクラテスは「善とは何か、を知らない」と明言する（505a, 506c-e）。この出発点を無視してはならない。それが何かを知らないと「不知の自覚」をくり返すソクラテスの言葉を、私は謙遜や韜晦ではなく文字通りに受け取る。では、彼がやむを得ず「比喩」で語ったものを、私たちはどう語ることができるのか。この問いを考える必要がある。

私は、ハイデガーの「善それ自体」の扱いには不十分な点が3つあり、それが彼のプラトン批判の成否にも関わるように思われる。

第一に、ハイデガーは「善のアイデア」も「アイデア」である以上、あるいは「アイデアのアイデア、最高のアイデア」である限り「見る」対象であると論じている。この含意をプラトンの比喩から読み取ることが不可能とは言わないが、それでも、「太陽を直接見ることができない」という『パイドン』の「言葉の中での探究」（99d-e）を合わせて読む時、善のアイデアを他のアイデアと同様に「見る」対象と位置づけることは難しい。「太陽」というイメージを比喩で語る際、2つの対話篇のもっとも有名なテキストは呼応し合うからである<sup>26</sup>。この点でハイデガーの扱いは非常に平板で、紋切り型であって、《洞窟の比喩》に対して示したテキストに寄り添った読み取りが見られない。

第二に、善それ自体が「あるの彼方 ἐπέκεινα τῆς οὐσίας」（509b）という決定的に重要

<sup>25</sup> 『ティマイオス』や『ポリテイア』第10巻「エルのミュートス」参照。生物の「種 εἶδος」ごとにあり方を固定して捉えるアリストテレスと対照的である。アリストテレスは「人間のアイデア」を語り批判するが、プラトン自身に由来するとは考えにくい。ニーチェをもじると、プラトンにとって、人間とは克服されるべき或るものだったのである。

<sup>26</sup> 《太陽の比喩》については、納富 [2018]、Notomi [2019]を参照。

な一節をハイデガーは重視しながら、「あるを超える」とされる善のアイデアの「あり方」をさらに問うてしまう点も問題である（99/107）<sup>27</sup>。哲学史では周知のように、この一句はプロティノス以来の新プラトン主義者が「一者」の身分への典拠とした、もっとも重要なテキストである。彼らは「あるを超える」という言い方が、それにはもはや「ある」を帰することができないという強い意味に解釈した。「彼方」という表現は、その中で突出して優れたという意味にも解されるため、その場合「善のアイデア」も「ある」と語りうることになるが、いずれにせよ、問題の多いこの箇所には十分な検討を行わずに、ハイデガーはこの「あることを超えた、善」を「視ること *ιδεῖν*」として把握したと定式化してプラトンを批判する（52/60）。新プラトン主義的な理解では、善それ自体は知の対象ではない。この点が解釈の成否と、その含意に決定的に関わってくる。

第三に、《太陽の比喩》は、実は《洞窟の比喩》にも増して「真理」を明示的に語っているはずであるが、ハイデガーはその扱いの優先を逆にしている。とりわけ、《太陽の比喩》の核心をなす一節、即ち、魂の目が「真理とあるが照り輝く<sup>28</sup>場所に据えられる時、魂は知性 *νοῦς* で捉え、それを認識し、知性を持つものとして現れる」（508d）という箇所を、ハイデガーは何故か完全に無視している。これは意図的なものか、軽率さか判断できないが、この箇所でプラトンは、「陽光 *φῶς*」に対応する契機を「真理 *ἀλήθεια* とある *τὸ ὄν*」としているにもかかわらず、ハイデガーはそれを「アイデア *ιδέα*」に対応させている（105-6/113の図）<sup>29</sup>。これは、類比で論を組み立てるこの比喩から素直に読み取れるはずのことであり、ハイデガーの誤りであるとしか言いようがない。類比において、むしろ「思惟されるもの *νοούμενον*」がアイデアにあたるが、そうするとハイデガーによるここでのアイデア論批判が成立しなくなってしまうからである。ハイデガーの類比理解が不正確、あるいは誤っているため、この一節で示される決定的に重要な「真理」のあり方を読み落としてしまっている。

以上3点のように、《洞窟の比喩》の解釈を補うものとしてハイデガーが持ち出した《太陽の比喩》の読解には重大な欠点があり、結論として、これらの箇所からプラトンにおける「根本体験の消失」（120/130）を読み取ることは難しい<sup>30</sup>。後に1940年の論文では、「善のアイデアが見られる」ということから、真理がアイデア論の軀の元にある（GA9, 234/286, 238/290）と結論することになるが、ハイデガーのこの勇み足は、「善それ自体とは何か」という問いと、それを慎重に切り出そうとしたプラトンのテキストを安易に扱ったために生じた失敗ではないか。具体的には、ソクラテスが「私は知らない」と表明して語り出し

<sup>27</sup> アイデアを「最も有るもの」としつつ、「すべてのアイデアをさらに超えて可視的になりうる最高のアイデアが存在するならば、それは有（既に最も有るものであるもの）を超えて、そして根源的な非秘蔵性（非秘蔵性一般）を超えて在らねばならない」（99/107）。

<sup>28</sup> 通常他動詞で「照らす」と訳されるこの箇所の *καταλάμπειν* を、山本建郎の提案に従い、自動詞で訳す。真理が「照らす」のか「照り輝く」のかは、ハイデガーの問題にとっても決定的に重要となるはずである。なお、この一節の無視については、Gonzalez [2009], 122 が推測を加えている。

<sup>29</sup> 補遺 7 (326/349) の図では「ウーシアアレーテイア」の中程に書かれており、この箇所を意識しているかもしれないが、誤りに変わりはない。508e5-509a2 では、「知識：真理＝視覚：光」という類比になっている。

<sup>30</sup> 「根本体験の消失」については、他に 17/17, 93/100, 123-5/133-4 などでも語られる。

た「比喩」を、「善それ自体を知る」という仕方で解釈したがゆえに生じた不首尾ではなかったかと、私には感じられる。

### （5）プラトンとのズレ

以上の分析から、ハイデガーの読解がプラトンからどうずれているかが、3点から明らかになる。ハイデガーが正面に掲げた「真理とは何か＝真理の本質」という問いを、プラトンは問わなかった。また、プラトンは「人間」を主題にして「誰か・何か」と問うことはなかった。そして、「善とは何か」を語ること、示すことの根源的な困難、隠れてあることに、プラトンは徹頭徹尾敏感に寄り添った。それは、「太陽」という直接目で見るができない、いや私たちの視力を破壊するものを、「比喩」においてかろうじて想起させる以外にはできないなにかであった。そこでハイデガーが「イデアは見られる」と言って批判することは、プラトンが愛し求めた「ある」の明るみへの畏怖と、暗闇での手探りの試行を、忘却する態度に思われる。

だが、プラトンからずれているということは、それ自体では誤りにも批判の理由にもならない。哲学する者はそれぞれが自ら問いを立てる。ハイデガーがプラトンのテキストに向きあって問いを追求したことは、彼がプラトン自身の問いになんらか揺さぶられたこと以外ではない。私は、それが2人の対決 *Auseinandersetzung* の実相だと考える。その後は、プラトンが挑んだその思考とハイデガーが示した解釈とを、私たちが付き合い合わせながら判定し、対決の結果を見極めるしかない。

私はハイデガーの不十分さを指摘する一方で、私自身、ハイデガーを簡単に批判したり無視できると思っただけではない。では、ハイデガーはプラトンを簡単に批判したのだろうか？ 彼は、おそらくプラトン自身も応答しきれないなにかの問いに向き合い、「真理・アレーテイア」という言葉から切り込もうとしたのである。私たち自身が、彼らと共に探究し、それに出会い、語る必要があるのである。

「アレーテイアとは何か」を問うことは、その根本体験が消失している現在において、ハイデガーにとって特別なことである。それは、かつてアレーテイアが生起したということの始源 *Anfang* とし、現在もそのまま生起であり続けさせるための、かろうじて可能な唯一の道である（122/132）。そうであるとする、その体験が生き生きとしていた時代にプラトンがこの問いに関わる仕方とは、大いに異なっていることになる。ハイデガーとプラトンのズレは、同じ問いを問うことが歴史において持つ意味の違いにあるのかもしれない。だが、哲学はそのように歴史的であるのか？

アレーテイアという根本体験がプラトンの中で消失していったというハイデガーの見取り図は、少なくとも『ポリテイア』の3つの比喩に即しては認められない。「アレーテイア」そのものを開示するとされる《洞窟の比喩》の後で、それに先立つ《太陽の比喩》における消失の始まりを論じることは、そもそも恣意的で不合理な読解であろう。

だが、プラトンのこの対話篇で消失が起こっていないとすると、後期対話篇においてそれが生じたと言うのだろうか。あるいは、プラトンではなくアリストテレスやそれ以後に消失したと言うのか。いずれにしても、それが哲学の問題としては、あまり大きな意味を

持たないことは容易に予想される。いつ失われ、誰に責任があるというのではなく、アレーテアの根本体験とその消失という事柄そのものが重要だからである。その意味で、ハイデガーの中でも消失が起こっているのかもしれないし、私たちの中で根本体験と消失がせめぎ合っているのかもしれない。歴史の事実の説明を帰して済ますことは、哲学ではない。

さらに、ハイデガーが強烈にこの根本体験に光をあて、その消失の歴史を批判した後で、私たちハイデガーを読む者は、はたして彼の批判を乗り越えていると言えるか。忘却から非秘蔵性を取り戻しているのか。あるいは、それ以前と同様に、問題をだまってみ過ごしているのではないか。そうであるとしたら、それこそが最大の「忘却」であり、プラトンの言う「無知 ἀμαθία」に他ならない。

#### 4、ハイデガー、プラトンを超えて：洞窟の内にあること

プラトンとハイデガーが歩調を共にする「洞窟から出る」根源体験としての「アレーテア」の哲学は、最終段階にも大きな問題を残す。ハイデガーは洞窟の内への帰還を論じる第4段階に注目したが、その意義を完全には解明できていないように見えるからである。

一方で、第4段階に至って初めて第1段階で語られたことが何だったのかが分かるという洞察は見事である（90/98）。洞窟を出た者が哲学者として内に戻るように、私たち自身がそうして哲学者となることが期待されている。そこで「自由になることを初めて本来的に完成する」（91/98、傍点原文）からである。

他方で、第4段階において内に戻った哲学者が何を為すのかは、一向に判明ではない。ハイデガーがそこで洞窟の内に立ち返った「哲学者」について論ずるが<sup>31</sup>、それは社会批判、あるいは「ソフィスト」という問題であり、本来の哲学者のなすべき事柄についてではない。プラトンが一連の比喩を語ったのが「哲学者＝政治家」の誕生を示すためであった以上、そこで「政治＝洞窟の内にあること」が何なのか、が解明されなければならない。ハイデガーは、すくなくとも講義と論文でその点を論じていない。『存在と時間』を書いたハイデガーがここで「死」という契機に注目しかけながら、それを深めなかったことは残念である。『パイドン』が、哲学を死の練習であるとしたその本来の「死」が、ここで関わらないとは言えない。

洞窟に戻った哲学者の役割が、秘蔵と非秘蔵との対立（90/97-8）の指摘に留まるのなら、洞窟内の人々にとっては単に破壊的な暴露にすぎない。そこで社会や政治を行うことが意味を持たず、洞窟の外に連れ出すこと、あるいはそれを示すことだけが求められるからである。

そのような《洞窟の比喩》における政治の欠落は、ハイデガーのアレーテア論の射程そのものに関わるように思われる。そこで決定的に欠けているものが何かは、プラトン哲

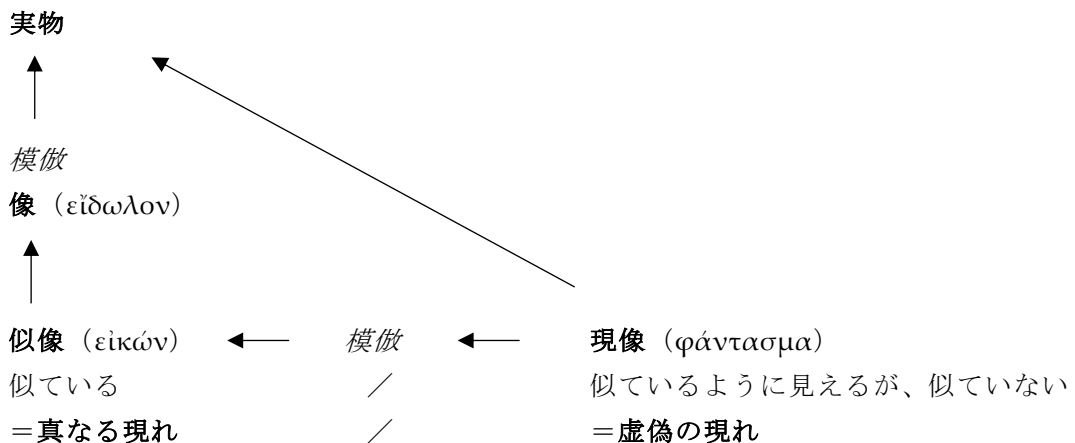
<sup>31</sup> ここで「哲学者」という語は使われていない。『ソフィスト』254a-bからの援用である（82/90-1）。

学との関係も含めてもっとも興味深い問題の一つである。

洞窟の外を見た哲学者は内で何を為すのか、いや、そもそも「内にある」と知ることが可能かという問題に、プラトンは後期対話篇『ソフィスト』で向き合った。それは、ソフィストを定義する過程で発生した、ソフィストからの反撃に応じて示すべき課題であった<sup>32</sup>。ハイデガーが適切に目を向けたように、「非真理」への問いを提起して考察したのはプラトンであった<sup>33</sup>。

哲学者がソフィストを「虚偽を語り、像を作り為す者」と規定しようとする試みに対して、ソフィストの側は「虚偽は存在せず、すべては真である」、また「すべてあるものは実物であり、像は無である」と反論する。この反撃と対決するには、「虚偽が存在すること」を証明し、「現れの真偽分別」を哲学の実践として遂行しなければならない。さもないと、《洞窟の比喩》で言えば、こうなる。「目の前の世界は、実際にある以上、すべてが実在である。あるいは、もしそれが実在でないのなら、すべては無に過ぎない」。これに対して、哲学をソフィストから守ろうとする探究者は、最終的に「像」における真偽分別、つまり似像と現像の区別を遂行しなければならない<sup>34</sup>。

### 現れの真偽分別



だが、この分割もソフィストの反撃を免れず、さらに根源的な探究を要請する。もし実

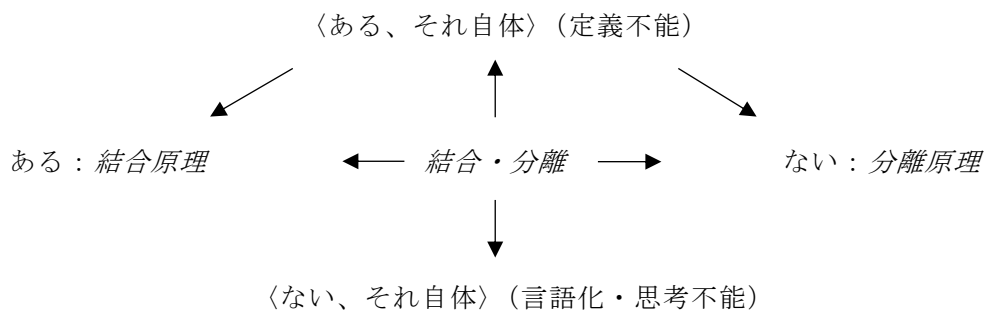
<sup>32</sup> 納富 [2002/1999] が全体の解明を行なっている。

<sup>33</sup> これまで「虚偽=非真理とは何か」を探究したのは、ほぼプラトン一人である。「哲学の歴史において最初にして最後にプラトンが現実に歩んだ非真理への問いの道のり」(129/137-8)。ただしそれは、ハイデガーが扱う『テアイテトス』以上に『ソフィスト』の問いであった。「非-真理 Unwahrheit への問いは回り道ではなく、唯一可能な道であり、真理の本質へのまっすぐな道なのである」(128/137)。本論文は、ハイデガー講義の後半部で展開される『テアイテトス』の解釈は扱わない。今後の課題としたい。

<sup>34</sup> 洞窟にもどった哲学者は「その影像が何であり、何の像かを識別する」とされる(520c)。これは像の真偽分別であろう。ハイデガーは、洞窟で哲学者が「影であることを、今や確定できる」(89/97)とするが、影像相互の真偽識別ではない限りで、その一節の意味を精確に把握していない。「現像」の役割については、ドゥルーズ『意味の論理学』の補遺「プラトンとシミュラクル」が哲学的な解釈を展開している。

物を見ることができない場合、どのように実物と像を区別し、その区別に基づく二種の像を区別できるのか。あるいは、「見る」ことは区別の根拠になるのか。この問いに応答する探究が、「ある／ない」の結合と分離の解明である。両者が適切に区別され、適切に結合する可能性が確保されることで、像の存在と、その2種への区別が可能になる。「ある」はそれ自体では捉えることはできない。あまりの明々みゆえに。「ない」はそれ自体では語ることも考えることもできない。完全な暗闇ゆえに。だが、私たちは実際にこの世界で、すでに「ある、ない」を語っており、考えている。私たちはすでになんらか「ある」の光の元にある。その言葉、思考において「真／偽」を峻別することが、哲学を可能にする。

### 「ある」と「ない」の関係



『ソフィスト』は虚偽の存在を証示し、はじめて「真」という地平を確保した。プラトンはこうして、西洋哲学で初めて「言表、思考、現れ」の「真／偽」を分別し、その規定に成功した<sup>35</sup>。ここで提示された「言表の真偽」が対応説の元祖と見なされることもあるが、私は、その見方は的外れであると考えている。ハイデガーが「非秘蔵性」として語った「アレーテア」から、この意味を再考する余地がある。『ソフィスト』における「真／偽」分別が、「哲学者／ソフィスト」を初めて分別したことも確認したい。

プラトンが『ソフィスト』で向き合ったのは、いわば洞窟の内にある私たちの言葉やあり方が、洞窟の内でもどのように区別されるのかという問題であった。これが、私たちが生きるこの世界で、政治がどのように可能かを切り開く道でもあった。それは『ポリテイア』から『ソフィスト』『ポリティコス』へ引き継がれる課題である<sup>36</sup>。

では、ハイデガーは、洞窟の内にある哲学者が為すべきことをどう考えたのか。そこに哲学と政治をめぐる暗い問題があるように思われる。また、ハイデガーによる後年のプラトン批判も、どこかその問題に関わっているように思われる<sup>37</sup>。

<sup>35</sup> ここで哲学史上初めて確定された「結合・分離」としての「真・偽」はアリストテレス『命題論』に受け継がれて定着する。

<sup>36</sup> Notomi [2017] 参照。

<sup>37</sup> 古荘 [2011] を参照。

## 【参考文献】

- GA 34: Martin Heidegger, *Von Wesen der Wahrheit: Zu Platons Höhlengleichnis und Theätet* (Wintersemester 1931/32), Hrsg. H. Mörchen, Gesamtausgabe 34, Vittorio Klostermann, Frankfurt am Main, 1988 ; マルティン・ハイデッガー『真理の本質について』、ハイデッガー全集第 34 巻、細川亮一、イーリス・ブフハイム訳、創文社、1995 年。
- GA 9: Martin Heidegger, *Wegmarken*, Hrsg. F.-W. von Herrmann, Gesamtausgabe 9, Vittorio Klostermann, Frankfurt am Main, 1976 ; マルティン・ハイデッガー『道標』、ハイデッガー全集第 9 巻、辻村公一、ハルトムート・ブフナー訳、創文社、1985 年 [「真性についてのプラトンの教説」収録] .
- GA 24: *Die Grundprobleme der Phänomenologie* (Sommersemester 1927), Hrsg.: F.-W. von Herrmann, Gesamtausgabe 24, Vittorio Klostermann, Frankfurt am Main, 1975 ; マルティン・ハイデッガー『現象学の根本諸問題』、ハイデッガー全集第 24 巻、溝口兢一、松本長彦、杉野祥一、セヴェリン・ミュラー訳、創文社、2001 年。
- マルティン・ハイデッガー『真理の本質について、プラトンの真理論』、ハイデッガー選集 11、木場深定訳、理想社、1961 年。
- Jonathan Barnes [2011], “Heidegger in the Cave”, in *Method and Metaphysics: Essays in Ancient Philosophy I*, Oxford University Press, 2011, 77-99 (原論文、*Revue de métaphysique et de morale* 95, 1990) .
- ギュンター・フィガール [2017]『問いと答え ハイデガーについて』、齋藤元紀ら監訳、法政大学出版局、2017 年。
- Gail Fine [2003], “Separation”, in *Plato on Knowledge and Forms*, Oxford University Press, 2003 (原論文、*OSAP* 2, 1984) .
- 古荘真敬 [2011]「形而上学の根源をめぐって ——ハイデガーのプラトン解釈の一側面」、『理想』686「プラトンの「国家」論」、理想社、2011 年、125-137 頁。
- Francisco J. Gonzalez [2009], *Plato and Heidegger: A Question of Dialogue*, The Pennsylvania State University Press, 2009.
- 細川亮一 [1992]『意味・真理・場所 ——ハイデガーの思惟の道』、創文社、1992 年。
- 細川亮一 [1994]「プラトン ——西洋存在論の射程」、大橋良介編『ハイデッガーを学ぶ人のために』、世界思想社、1994 年、20-40 頁。
- Drew A. Hyland and John Panteleimon Manoussakis (eds.) [2006], *Heidegger and the Greeks: Interpretative Essays*, Indiana University Press, 2006.
- 川島重成 [2004]『アポロンの光と闇のもとに ——ギリシア悲劇『オイディプス王』解釈』、三陸書房、2004 年。
- 小島和男 [2016]「プラトン 豊かな暗闇」、『続・ハイデガー読本』、法政大学出版局、2016 年、20-27 頁。
- 納富信留 [2002]『ソフィストと哲学者の間 ——プラトン『ソフィスト』を読む』、名古屋大学出版会 (2002 年) ; 原著、*The Unity of Plato's Sophist: Between the Sophist and the Philosopher*,



Cambridge University Press, 1999.

納富信留 [2015a] 『プラトンとの哲学 ——対話篇をよむ』、岩波新書、2015 年.

納富信留 [2015b] 「アイデアの超越 ——魂の変容と現実の開示」、『思想』1097、岩波書店、2015 年 9 月号、41-49 頁.

納富信留 [2018] 「プラトン「太陽」の比喩」、山内志朗編『光の形而上学 ——知ることの根源を辿って』、慶應義塾大学出版会、2018 年、5-25 頁.

Noburu Notomi [2017], “Reconsidering the Relations between the Statesman, the Philosopher, and the Sophist”, *Plato’s Statesman: Dialectic, Myth, and Politics*, John Sallis (ed.), SUNY Press, 2017, 183-195.

Noburu Notomi [2019], “Imagination for Philosophical Exercise in Plato’s *Republic*: The Story of Gyges’ Ring and the Simile of the Sun”, *Psychology and Ontology in Plato*, Luca Pitteloud and Evan Keeling (eds.), Springer, 2019, pp. 1-13.

Catalin Partenie and Tom Rockmore (eds.) [2005], *Heidegger and Plato: Toward Dialogue*, Northwestern University Press, 2005.

渡部明 [1994] 「ハイデガーとプラトン ——二つの「洞窟の比喩」解釈から」、九州大学文学部『哲学年報』53 (1994 年)、25-42 頁.